談話分析の手法と分析例（1）

貫　井　孝　典

1．談話分析の歴史的背景

談話分析（discourse analysis）は、1960年代の後半に言語学とその隣接科学（哲学、心理学、社会学、文化人類学など）における言語コミュニケーションの研究から発展した研究分野である。「談話分析（discourse analysis）」という用語を最初に用いたのは、米国構造言語学者のハリス(Z.S. Harris,1952）であったが、言語学の分析対象が従来「文」に限られていたのを「文を超えた範囲」にまで広げたという功績はあるが、現在の談話分析とは全く異なる意味でこの用語を用いていた。ハリスの弟子チョムスキー（N. Chomsky）が構造言語学の限界を見抜き、新たに生成変形文法理論を公にしたのが1957年の syntactic structure である。その後、Chomsky (1965) Aspects of the theory of syntax を皮切りに次々に修正理論を提出していった。同じ米国でこれとは別に文化人類学におけるコミュニケーションの研究がハイムズ（D. Hymes, 1964）らによって進められ「ことばの民族誌」(ethnography of communication）という学問分野が確立した。ハイムズらに影響を与えた学者の一人はポーランドの社会人類学者マリノフスキー（B. Malinowski, 1923）によるトロビリアンド諸島の民族誌の研究であり、もう一人はヨーロッパプラーグ学派のヤコブソン（R. Jakobson, 1960など）の言語の多機能性の研究であった。

一方、英国のロンドン学派の流れを汲むミッチェル（T.F. Mitchel,1957)は、キレナイカ地方の売買のプロセスを分析し、以下のような商取引の段階（stage）を考えた。

1. 挨拶（salutation）
2. 販売対象物についての質問（enquiry as to the object of sale）
3. 販売対象物についての吟味（investigation of the object of sale）
4. 取引き交渉（bargaining）
5. 妥結（conclusion）

上記ミッチェルの分析が現在の談話分析の方法を示唆する研究である。ロンドン学派の談話分析には、バーミンガム大学のシンクレア＆ブラジル（J.McH. Sinclair & D. Brazil）による「教室の談話分析」(Teacher talk, 1982）などがある。

1970年代に入ると、サックス（H. Sacks)、シェグロフ（E.A. Schegloff)、ジェファーソン（G. Jefferson）らが日常のことばのやりとりを記述し分析することにより「会話分析」という新たな学問分野を開拓した。
最近では、談話分析を応用して法廷談話の分析、言語と社会的権力やイデオロギーとの関係などを批判的に探求する批判的談話分析（Critical Discourse Analysis）も注目されている。

2．談話分析の流れ

談話分析の流れは、概略以下のように4つに大別できるであろう。

（1）機能主義・テクスト言語学の流れ ― これはヨーロッパのプラーグ学派（Prague School）に属するヤコブソン（R. Jakobson)、バヘック（J. Vachek)、デインズ（F. Daneš)、ファーバス（J. Firbas）などが中心となって「機能的文眺望」(Functional sentence perspective, FSP）と呼ばれる言語分析を行なった。これは情報が文の中にどのように配置されているかを記述する。FSP は特に、談話（discourse）における既知（旧）情報と新情報の分布の効果を扱う。このプラーグ学派の流れを汲むのがイギリスのロンドン学派言語学（London School of Linguistics）でありロンドン大学のファース（J.R.Firth）の場面の脈絡（Context of situation）の概念がこの学派の特徴の一つである。ファースの理論を継承・発展させたのがハリデー（M.A.K.Halliday）で、彼は選択体系機能文法（Systemic functional grammar）を提唱したが、特に COHESION、つまり文と文を関

連づける明示的なつながりの研究は談話分析に大きな影響を与えている。また、ロンドン学派の流れを汲むグループの中で教室での教師と学生の談話を分析したのがシンクレア（John Sinclair）を中心とするバーミンガム大学のグループである。さらに最近の批判的談話分析を精力的に行なっているランカスター大学のフェアクロウ（N. Fairclough）などもロンドン学派の流れを汲んでいる。

（2）コミュニケーションの民族誌の流れ ― 言語学と文化人類学との境界領域に成立したのがコミュニケーションの民族誌（ethnography of communication）である。このグループはスピーチイベント―すなわち、参加者(participant)、チャンネル(channel)、コード(code)、場面(setting)、メッセージ(message)、規範(norms)などの構成要素―を談話行動の中心にすえて分析・記述すること（=speech event analysis）がねらいである。それは個々の文化の中で繰り返し行なわれるコミュニケーション活動を総合的に記述しようとするものである。この分析方法の提唱者は、アメリカの社会言語学者ハイムズ（前出）である。この研究方法には次の3つの特徴があり、①文化・社会の形式とその内容を結果としてではなく過程として研究する、②発話の構造とその機能に目を向ける、③文化人類学と言語学という異なる分野に橋を架けようとして、独自の研究領域と研究方法を築き上げた点が注目される。このグループに属する学者にはハイムズの他にガンパーズ（J. Gumperz)、シフリン（D. Schiffrin)、タネン（D. Tannen）などがいる。

（3）会話分析（conversation analysis）の流れ ― エスノメソドロジー（ethnomethodology）の影響下で、サックス（前出)、ガーフィンケル（H. Garfinkel)、シェグロフ（前出)、ジェファーソン（前出）などの学者が提唱した分析方法であり、ゴフマン（E.Goffman）もこの流派に入れられよう。録音された日常会話を丁寧に文字化・記号化し、それを言語資料にして、会話の仕組みを明らかにしようとするのが会話分析である。会話分析の仕事は、一見無秩序に聞こえる日常会話の中に一種の構造を見出そうとして、会話のルールを探り出すものである。扱われる課題には会話の始め方、終わり方、話者交代、同時発話、一時休止（ポーズ)、修復・訂正、隣接応答ペア、などがある。例えば、電話での会話は、ハローなどの呼びかけ→自分の名前を告げる→挨拶→安否を尋ねるやりとり→本題→終結の前段階→終結、のような段階を経るのが通常である。

（4）発話行為論（speech act theory）の流れ ― 言語学と哲学の間に生まれたのが発話行為論を含む語用論である。オックスフォード大学の哲学者オースチン（J.Austin）は、米国のハーバード大学での講演をまとめて出版した Austin (1962)の中で「発話はそれ自体行為でありうる」という先駆的見解を発表した。彼によれば、すべての発話はその文字通りの意味を持つと同時に特定の発語内の力を持ち、それによって特定の行為を行なうことになる。この発話と同時に行なわれる行為は、次の3つに分類されている。①発語行為（locutionary act)、つまり一定の意味と指示機能を持つ文を発すること、②発語内行為（illocutionary act)、つまりその文を発することで、その文と結びついている「依頼」「約束」等の発語内の力を行使すること、③発語媒介行為（perlocutionary act)、つまりその文を発することによって、聞き手に対して発話の状況に特有の効果（船の命名式など）を引き起こすこと。発語内行為を行なうために用いられる文、およびそれが具現化された発話は遂行文（performatives）と呼ばれる。中でも、遂行動詞を含む文は明示的遂行文と呼ばれる。オースチンは遂行文が成功するために満たさなければならない諸条件を3つに分類して、適切性条件（felicity conditions）と呼んだ（例えば、船の命名式で遂行文を発するのは船主などの立場の人が、一定の時と場所において発語する必要があるなど)。

オースチンの理論を発展・拡充させ、遂行動詞を含む発話（遂行文）だけでなく、あらゆる発話が行為であると主張したのが弟子のサール（J. Searle）である。サールは後に、ある発話行為は別の発語内行為によって間接的に遂行することができるとして、間接発話行為（indirect speech act）理論も提唱した。このようなスピーチアクト理論は、ハイムズらの「ことばの民族誌」にもスピーチイベントの概念で影響を与えた。

3．談話分析の分析対象となる項目

（1）機能主義言語学・テクスト言語学で分析対象となる項目 — cohesion（結束構造、つながり）、coherence（一貫性）、reference（指示）、substitution（代用）、ellipsis（省略）、ideational function（観念的機能）、interpersonal function（対人関係的機能）、textual function（テクスト的機能）、classroom interaction（教室内の相互行為）、anaphora（前方照応）、cataphora（後方照応）、given/ new information（旧情報・新情報）、information structure（情報構造）、script（スクリプト）、schema（スキーマ）など。

（2）コミュニケーションの民族誌で分析対象となる項目 — speech event（スピーチイベント）、speech act（スピーチアクト）、speech situation（スピーチの状況）、language socialization（言語の社会化）、contextualization cues（コンテクストキュー）、conversational inference（会話の推測）、frame（フレーム）、footing（フッティング）、metamessages（メタメッセージ）、participation framework（参加者枠組）code-switching（コードの切り替え）、conflict（衝突）、convergence（収束）、divergence（逸脱）など。

（3）会話分析（相互行為理論）で分析対象となる項目— adjacency pair（隣接応答ペア）、back channel（あいずち）、opening and closing（会話の開始と終結）、discourse marker（ディスコース・マーカー）、turn taking（話者交代）、filler（つなぎ言葉）、floor（フロア）、hesitation（言いよどみ）、interruption（割り込み）、overlap（オーバーラップ）、repair（修正）、repetition（繰り返し）など。

（4）発話行為論で分析対象となる項目 — indirect speech act（間接発話行為）、illocutionary act（発語内行為）、perlocutionary act（発語媒介行為）、preparatory condition（予備条件）、sincerity condition（誠実性条件）、felicity condition（適切性条件）、politeness（ポライトネス）、face（面子）、face-threatening act（FTA）（面子を脅かす行為）、deixis（ダイクシス、直示性）など。

4．COHESION（結束性）の分析例

4.1 COHESION の定義

Haliday & Hasan(1976)の用語。彼らはCOHESION（結束性）の概念を、"The concept of cohesion is a semantic one; it refers to relations of meaning that exist within the text, and that define it as a text"（結束性の概念は意味的なものである。それはテクスト内に存在し、テクストをテクストとして定義する意味の諸問題のことである。）と説明し、さらに"Cohesion is part of the system of a language. The potential for cohesion lies in the systematic resources of reference, ellipsis and so on that are built into the language itself."（結束性は、言語体系の一部である。結束性の可能性は、言語それ自体に組み込まれている指示、省略などの体系的手段の中にひそんでいる。）と定義している。そしてこの体系的手段をTIES（つながり）と呼び、①指示（reference）、②代用（substitution）、③省略（ellipsis）、④接続（conjunction）、⑤語彙的結束性（lexical cohesion）の5つのTIESがあると説明する。以下にそれぞれの結束性のTIESの例を上げてみる。

①指示： Three blind mice, three blind mice. See how <u>they</u> run! See how <u>they</u> run!
（指示には、人称代名詞、指示詞、比較語の3種類がある。）

②代用： These biscuits are stale. Get some fresh <u>ones.</u>（代用には、one, ones, same の名詞の代用、do による動詞の代用、so, not による節の代用の3種類がある。）

③省略： What have you been doing?—∧Swimming.（省略には、名詞句、動詞句、節の3種類の省略がある。）

④接続： All the figures were correct; they'd been checked. Yet the total came out wrong.（接続の意味的範疇には、付加的、反意的、因果的、時間的の4つがあり、上記例文のYetは反意的である。）

⑤語彙的結束性： Can you tell me where to stay in Geneva?—I've never been to the place.（Genevaがthe placeで言い換えられている。このように語彙の選択によって得られる結束的効果を語彙的結束性と呼ぶ。）

COHESIONの研究はHallidayやその奥さんであるHasanを中心とするSystemic Functional Linguistics (SFL) グループやGleason (1968), Gutwinski (1976)らのHartford Stratification Linguisticsグループらによって研究が進められている。SFLグループの流れを汲むMartin (1992) はGleason, Gutwinskiらにトロント大学で学び、Halliday & Hasan (1976) のcohesion tiesをdiscourse semanticsの立場から新たな解釈を加えた。彼はCOHESIONを"a set of discourse semantic systems at a more abstract level than lexicogrammar, with their own metafunctional organization"（独自のメタ機能的組織を持ち、語彙文法よりも一層抽象的なレベルにおける談話意味論的体系の集合）として、①identification (textual meaning)、②negotiation (interpersonal meaning)、③conjunction (logical meaning)、④ideation (experiential meaning)の4つの「談話構造に関わる意味論的体系」を提案している。

①Identificationは、"resources for tracking participants in discourse"と定義され、従来のreferential cohesionの概念に基づいている。②Negotiationは、"resources for exchange of information and of goods and services in dialog"と定義され、従来のellipsis, substitutionに基づいている。③Conjunctionは、"resources for connecting messages, via addition, comparison, temporality, and causality"と定義され、従来のconjunction (= linking between clauses)の概念に基づいているが、Gleason(1968)のinternal-external conjunctive relationsやLongacre(1976)のrelations between propositions in discourseなどの理論も取り入れている。④Ideationは、"the semantics of lexical relations as they are deployed to construe institutional activity"と関わると定義しているが、これは従来のlexical cohesionに基づく概念である。

4.2 データと解説

(1)The Dursleys had everything they wanted, but they also had a secret, and their greatest fear was that somebody would discover it. (2)They didn't think they could bear it if anyone found out about the Potters. (3)Mrs Potter was Mrs Dursley's sister, but they hadn't met for several years; in fact, Mrs Dursley pretended she didn't have a sister, because her sister and her good-for-nothing husband were as unDursleyish as it was possible to be. (4)The Dursleys shuddered to think what the neighbors would say if the Potters arrived in the street. (5)The Dursleys knew that the Potters had a small son too, but they had never even seen him. (6)This boy was another good reason for keeping the Potters away; they didn't want Dudley mixing with a child like that.
(J.K.Rowing; Harry Potter and the Philosopher's Stone, p. 7)

上記の英文において、下線をつけたThe Dursleys（ダースレイ家の人々）, they, theirなどは全て指示関係を示しておりMartin(1992)のidentificationに相当する。また(1)のa secretとit, (2)のitも指示関係である。さらに(3)のMrs Potter, Mrs Dursleyとthey、(3)のMrs Dursleyとshe、(3)のsisterとher(good for nothing husband)、(5)のa small sonとhim及び(6)のThis boyも指示関係のCOHESIONである。以上はテクストの文脈照応型の（指示の）結束性であるが、(6)のthe neighbors, the streetのtheの指示性は場面の外界照応型の結束性を示す。つまり、ダースレイ家の付近の住民であり、付近の通りを指示している。

その他の結束性のTIESには接続関係を示すbut, and, becauseなどが見られる。また、(5)のa small son、(6)のThis boyとa child like thatは語彙的結束性(つまりMartinのIdeation)を示している。

5．ADJACENCY PAIR（隣接応答ペア）の分析例

5.1 ADJACENCY PAIR の定義

Schegloff & Sacks (1973) で初めて用いられた用語。会話分析は日常的なことばのやりとりを観察し、最小のまとまりとして「隣接応答ペア」という分析単位を設定した。典型的なペアとしては、「問い－返答」、「挨拶—挨拶」、「招待・申し出—受諾・拒否」、「陳謝—軽減語」、「不服—謝罪」、「文句・不平—否定・侘び」、「要請—許可」、「情報の要請—情報の提供」などがある。Schegloff & Sacks (1973) は「隣接応答ペア」の特徴を次のように述べている。①隣接する発話であること、②異なる話者による発話であること、③第一部分、第二部分という順序があること、④「申し出—受諾・拒否、挨拶—挨拶」のように第一部分が第二部分を要求するという意味で型にはまっていること。ただし、①に対しては次のような挿入連鎖 (insertion sequence) が隣接性を弱めることになる。

A: (Q1) May I have a bottle of Mich?
B: (Q2) Are you twenty one?
A: (A2) No.
B: (A1) No.
注　Q: Question (問い)、A: Answer (返答)
(Levinson (1983), Pragmatics. P.304)

上の例文では、Mich（一種のアルコール飲料）を買いにきたAが、店にMichがあるか否かを確かめるQ1を発話する。未成年者にアルコール飲料を販売することができないので店の人Bが客の年齢を尋ねるQ2を発話する。それに対して、AがA2の返事をしたことによって店の人は客が成人に達していないことを知り、改めてQ1に対する返答としてA1によってMichを売ることができないことを伝える。つまり、Q２－Ａ２は挿入発話である。

次に「招待—受諾・拒否」などの隣接応答ペアにおいて、第一部分に対する第二部分になりうるのはすべて同等にあるのではない。隣接応答ペアには好ましい (preferred) 応答と好ましくない (dispreferred) 応答があり、好ましい応答は無標 (unmarked)、つまり基本的で自然で使用頻度が高く、好ましくない応答は有標 (marked) となる。例えば、「招待」に対する「受諾」は好ましい応答で無標となり単純即発的 (simple and immediate) な応答となるのに対して、「拒否」の場合は好ましくない応答で有標となり、応答の遅れ、'well'のようなターンシグナル、拒否の理由、招待に対する謝意などの付加的要素がつくことになる。

5.2 データと解説

(ERINは二度離婚し、8才のMATHEW、6才のKATIEと生後9カ月の赤ん坊と4人暮らしをしているが借金がある上に、所持金も少なくなっている。家に食べ物が無いので夕暮れに子供たちをつれてファーストフードレストランに出かける。)

01 RIN: You kids go ahead and order. (R1)
02 MATHEW: Okay (A1) , I'm gonna have a cheeseburger deluxe with a Coke.(R2)
03 WAITRESS: Okay. (A2)
04 KATIE: Mommy, can I have a cheeseburger deluxe with no cheese and no bread? (Q3)
05 ERIN: …(A3) Did you get that? (Q4)
06 WAITRESS: Yeah.(A4)
07 ERIN: And she will have a cup of chicken broth and a few crackers, please. (R5)
08 WAITRESS: …(A5) And for you? (Q6)
09 ERIN: Just a cup of coffee.(A6/R7)
10 WAITRESS: Okay.(A7)
11 MATHEW: Mom, you're not eating? (Q8)

12 ERIN: Well, my lawyer took me out to a fancy lunch to celebrate, and I'm still stuffed. How 'bout that! (A8)

(注) R: Request (要請・注文)、A: Answer (返答・了解)、Q; Question (問い)

(Susannah Grant, 2000, ERIN BROCKOVICH, スクリーンプレイ出版、p.20)

上記の対話で、01 (R1)—02 (A1)は「要請—了解」、02 (R2)—03 (A2)は「注文—了解」のように分かりやすい隣接応答ペアである。04 (Q3)—05 (A3)は、KATIE の「チーズバーガーを注文していい」という「要請・問い」に対して、母親の ERIN は無言で「許可・返答」を表し、さらに KATIE の「要請・問い」をウェイトレスに対して確認の「問い」を発し、ウェイトレスは06 "Yeah" (A4)で「返答」するという構造になっている。さらに母親 ERIN は娘の KATIE のために07(R5)によって追加の「注文」をし、ウェイトレスは08…(A5)で、無言で「了解」を表し、続いて母親 ERIN の注文に対する「問い」(Q6) "And for you?" を発し、それに対して ERIN は09 "Just a cup of coffee." によって(A6)「返答」と「注文」の両方の隣接応答ペアを兼ねさせている。最後に、11 "Mom, you're not eating?" という MATHEW の「問い」に対して、実はお金が無いから食べないのだが、12 (A8)で一種のホワイトライ (罪の無いうそ) で「返答」している。このように、隣接応答ペアは、個々の発話が 1 対 1 の関係にならずに、無言で「了解・返答」を表すなど複雑に絡み合っているのが現実である。

5. 旧情報・新情報と要素の移動現象の分析例

5.1 旧情報 (given information) ・新情報 (new information) の定義

英語を含む多くの言語の情報構造は、聞き手が既に知っている情報、つまり旧情報から、聞き手がまだ知らない情報、つまり新情報へと流れるのが一般的である。言い換えれば、話し手が聞き手に最も伝達したい重要な情報 (焦点要素) は、できるだけ文末に置かれるのが一般的な情報上の原則である。

旧情報とは、「発話の時点で聞き手の意識の中にある知識」(Chafe, 1974, 1976) であり、音声的には強勢を置かずに発音される。旧情報の形は、(1)指示表現 (定冠詞を伴った名詞、this, that などの指示代名詞、人称代名詞など)、(2)代用表現 ("I don't know the meaning of half those long words, and, what's more, I don't believe you do either!" 動詞の代用例)、(3)省略 ("Which last longer, the curved rods or the straight rods?"—"The straight∧are less likely to break." 名詞句の省略例)、(4)繰り返し、(5)語彙的なつながり、などがあるが、これらは Halliday & Hasan (1976) の COHESION のつながり(TIES)とほとんど一致する。また、旧情報の現われる位置は、前の文にできるだけ近い所、普通は主語の位置が最も自然である。

新情報とは、「話し手が聞き手の思考に初めて持ち込む (と話し手が判断した) 情報」(Chafe, 1970) であり、新情報は通常、強勢を置いて発音される。新情報の現われる位置は、文の後ろの方である。したがって、「旧情報→新情報」というのが情報伝達の原則であり、これは「(主語を含む) 主部→述部」という文構造と、概略一致している。例えば、"What's the matter with John?"—"He broke his father's vase."においては、第 2 文の He が旧情報を表し、broke 以下が新情報を表している。しかし、文法構造と情報構造とは独立した存在である。そこで、例えば、

(a)John painted the shed yesterday.

(b)John painted the shed yesterday.

(c)John painted the shed yesterday.

(d)John painted the shed yesterday.

上記の例文中、(a)は "What happened?" に対する応答文として無標の (自然な) 文である。それに対して、(b), (c), (d)は、それぞれ下記の(e), (f), (g)の問いに対する (有標な) 応答文として適切である。

(e)Who painted the shed yesterday?

(f)What did John do to the shed yesterday?

(g)When did John paint the shed?

上記の下線部の強勢を伴って発音される語は焦点（FOCUS）と呼ばれ、このような場合は「旧情報→新情報」の情報の流れの原則に反することになる。

上で「文末」が基本的に聞き手の注意を引きやすく、話し手が最も伝えたいことを述べるのに適している位置であることを指摘したが、「文頭」も情報伝達上、ある程度重要な役割を果たす位置である。文頭とは、そこから文が始まることを示す位置であり、伝達内容の方向づけをする。話し手が何かを伝達するとき、いきなり述べたのでは聞き手は混乱する。そこで「～について」「～を述べる」というのが基本的な伝達行為の型である。この「～について」の部分を「主題」（THEME）という。最も普通の主題は主語である。ところが、以下のように意図的に主題を鮮明にする場合がある。

(h)As for that dress, I promise I won't wear it.

(i)Speaking of Mary, many boys would like to kiss her.

(j)Yesterday, John painted the shed.

このような主題に続く残りの部分は題述（RHEME）と呼ばれる。（THEME, RHEME は機能主義言語学、特にヨーロッパのプラーグ学派の概念である。）談話の流れを良くするためには、文の要素が「旧情報（情報量の少ないもの）→新情報（情報量の多いもの）」の順に並ぶのが理想である。ところが、文の要素を強制的に配置させる文法規則（統語論）がある。そこで談話の原則が好む語順と文法規則に則る語順が一致しない場合には、伝達を効果的にするための方法を利用する。その一つは、上記の(b), (c), (d)のような音声的な強勢（対照強勢）を用いる方法であり、もう一つは文の要素を（文頭または文末に）移動させる方法である。以下に、(A)文頭への移動と、(B)文末への移動の例をあげる。

(A) 文頭への移動（主題化、話題化とかかわりがある。）

(k)Mary turned the light on. → The light was turned on by Mary.（受身化）

(l)John painted the shed yesterday. → The shed, John painted yesterday.（話題化）

(B) 文末への移動（情報価値の高い要素の文末への移動とかかわりがある。）

(m)The claim that the rain caused the accident was made. → The claim was made that the rain caused the accident.（名詞句からの外置）

(n)These colors don't match. → They don't match, these colors.（右方転位）

上の(k)では、誰かが電気をつけたのが分かっている場合の語順であり、(l)では the shedが話題に上った場合の語順である。また、(m)では情報量が多く（長い）that 以下の節が文末に移動した例であり、(n)では、these colors を強調して文末に移動した例である。したがって、"What colors don't match?" に対する応答としては "These colors don't match." が適切となる。

5.2データと解説

上記、4.2 の隣接応答ペアのデータとして用いたのと同じシナリオから、3 人の子供を育てながら弁護士事務所で働いている ERIN が、弁護士 ED MASRY が連絡の電話をかけなかったことを責めている場面である。

(Ed walks across to speak to Erin.)

ED: Erin! How's it goin'?

ERIN: You never called me back. I left messages.

ED: You did? Well, I... I... I... I didn't know that. Er. Donald seems to think that you said that…

ERIN: There's two things that aggravate me, Mr. Masry—being ignored and being lied to.

ED: I never lied.

ERIN: You told me things would be fine. They're not. I trusted you.

(Susan Grant, 2000, *ERIN BROCKOVICH*, スクリーンプレイ出版、pp. 24-26)

上記シナリオの対話中、下線部の"being ignored and being lied to"は、"Being ignored and being lied to aggravate me."という文法規則に則る語順では、いきなり新情報が文頭にくることになる。そこで two things という語彙的結束性を表す語句を文頭において、後方照応的な働きをさせて "Two things aggravate me, being ignored and being lied to." というプロセスがあったと推測される。それでもなお、文頭にいきなり Two things という一種の新情報がくるのは唐突の感はまぬがれない。そこで要素の「右方向への移動」の一つの手段である「there 構文」(A girl is in the room.→ There is a girl in the room.など) を用いて、文頭に There を置く構文を採用し、"There are two things, being ignored and being lied to."のようなプロセスを経て、最終的には関係代名詞構文を取り入れて、シナリオのような文が成立したのではないかと推測される。実際には、シナリオ作者は上記のようなプロセスでなくネイティブスピーカーの直感で上記のセリフを思いついたと考えられる。しかし、上記のセリフが「旧情報→新情報」の談話の流れと関わりがあることは間違いなかろう。

参考文献：

Austin, J.L. (1962) *How to do things with words.* Oxford University Press

Chomsky, N. (1957) *Syntactic structures.* Mouton

Chomsky, N. (1965) *Aspects of the theory of syntax.* MIT Press

Coulthard, M.(1977) *An Introduction to Discourse Analysis.* Longman.

Gardner, R. (1977) "Conversation Analysis" in Davies, A. & Elder, C.(2004) *Applied Linguistics*, pp.262-284

Gleason, H.A.Jr. (1968) Contrastive analysis in discourse structure. In *Momograph Series on Languages and Lisguistics 21* (Georgetown University Institute of Languages and Linguistics)

Gumperz, J. (1971) *Language and social groups.* Selected & introduced by S.D. Anwar. Stanford University

Gutwinski, W. (1976) *Cohesion in Literary Texts: A Study of Some Grammatical and Lexical Features of English Discourse.* The Hague: Mouton

Halliday, M.A.K. and Hasan, R. (1976) *Cohesion in English.* Longman.

Harris, Z. (1952) Discourse analysis. *Language* 28: 1-30

Hymes, D. (1962) The ethnography of speaking. In T. Gladwin and W.C. Sturtevant(eds.) *Anthropology and human behavior.* Anthropological Society of Washingtom.

Jacobson, R. (1960) Closing statement: Linguistics and poetics. In T.A. Sebeok (ed.) *Style in language.* MIT Press.

Levinson, S.(1983) *Pragmatics.* Cambridge University Press.

Longacre, R.E. (1976) *An Anatomy of Speech Notions.* Lisse: Peter de Ridder.

Malinowski, B. (1923) The problem of meaning in primitive languages. In C.K. Ogden and I.A. Richards (eds.) *The meaning of meaning.* Routledge.

Mitchell, T.F. (1957) The Language of buying and selling in Cyrenaica. *Hesperis* 44: 31-71

Sacks, H., Schegloff, E.A. and Jefferson, G. (1974) A simplest statements for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50, 696-735

Schegloff, E. A. & Sacks, H. (1973) Opening up closings. Semiotica 8(4): 289-327

Searle, J.R. (1969) *Speech acts.* Cambridge University Press

Searle, J.R. (1975) Indirect speech acts. In P.Cole and J.L. Morgan (eds.) *Syntax and semantics 3:* Speech acts. Academic Press

Sinclair, J. McH. & Brzil, D. (1982) *Teacher talk.* Oxford University Press.

小池生夫他編（2003）『応用言語学事典』研究社
高原脩、林宅男、林礼子（2002）『プラグマティックスの展開』勁草書房
高見健一（1997）『機能的統語論』くろしお出版
橋内 武（1999）『ディスコース―談話の織りなす世界』くろしお出版
福地 肇（1985）『談話の構造』大修館書店
好井裕明、山田富秋、西坂仰（1999）『会話分析への招待』世界思想社